

「自己理解シート」の活用と 「担任＋進路サポーター」の連携で、 生徒の主体的な進路選択を支える

かいつめいせい
▶ 海津明誠高校(岐阜・県立)

取材・文／笹原風花



進路指導部長
佐藤圭司先生

海津明誠高校の進路指導の特色が、今年で9年目となる「進路サポーター制度」だ。全校の教員で生徒の進路実現を支える取組で、3年生の生徒1人につきクラス担任以外の教員1名が進路サポーターとしてつく。生徒と進路サポーターとのマッチングは、生徒の進路希望性と

担任11名で生徒の進路実現を支える「進路サポーター制度」

格、適性などに応じて、進路指導部が行う。今年度の3年生は157名。教頭をはじめ管理職を含む全37名の教員が進路サポーターを務め、1人につき4〜5名の生徒を受けもっている。本制度が始まる以前より同校に勤務し、今年度より進路指導部長を務める佐藤圭司先生はこう話す。

「本制度には、生徒一人ひとりの主体的な進路実現を支えることに加え、3年生のクラス担任を助けるという意味合いもあります。本校ではもともと進路が多様だったうえに、近年は大学の入試方式が多様化し、志望理由書の添削や小論文の指導など、担任の負担が著しく大きくなっていました。そこで、ほかの先生に進路サポーターとして入ってもらい、協力して生徒を支えることで負担を軽減し、よ

進路指導の課題とテーマ

岐阜県最南端に位置する海津市にある海津明誠高校は、1921年創立の海津高校(普通科)と1983年創立の海津北高校(情報処理科・生活福祉科)の再編により、2005年に開校した学校。普通科(文系・理系・看護系・教養系)・情報処理科・生活福祉科(ライフ類型・福祉類型)の3つの科からなる。部活動も盛んで、特にヨット部はインターハイや国体で24回もの優勝を誇る強豪だ。

生徒の進路状況は、大学進学、短大進学、専門学校進学、就職など、いずれの科でも多様になっている。この多様さゆえに、学年全体に向けた統合的なキャリア教育や進路指導と同時に、生徒一人ひとりの進路や特性に応じた個別支援・対応が求められ、特に3年生のクラス担任の負担は大きなものとなっていた。一部の教員に集中しがちな負担を軽減し、生徒一人ひとりの進路実現を支援するために、同校では2012年度に「進路サポーター制度」を創設。これを軸として、学校が一丸となったキャリア教育ならびに進路指導を実践している。

一方、「素直で素朴」な生徒が多く、吸収力があり良い面もあるものの、教員の助言や指導をそのまま受け入れてしまう受け身な一面があることが課題となってきた。今年度からは、生徒が自分の進路について主体的に考え、自ら選び取るための支援をさらに強化。学校を挙げて進路指導に取り組んでいる。

◎進路状況(2020年3月実績)

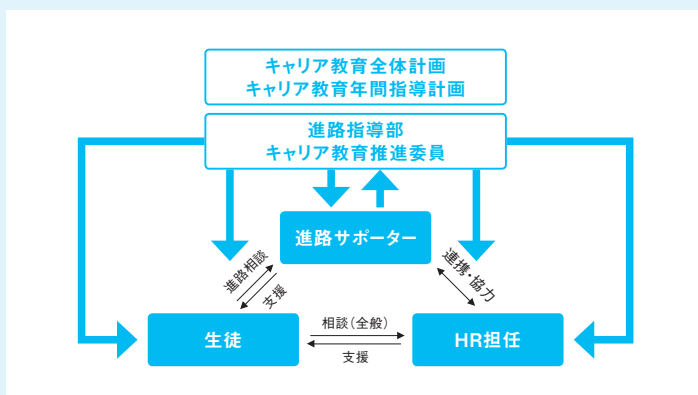
大学進学43人、短大進学9人、専門学校進学40人、就職75人、その他8人

進学先、就職先とも県内や愛知県が中心で、地元志向が強い。生徒が集中する学校は少なく、進学希望のなかでも多様な進路指導が求められている。

◎School Data

1921年創立(2005年に再編)/普通科・情報処理科・生活福祉科/生徒数481人(男子216人・女子265人)

図1 海津明誠高校のキャリア教育全体像



表

自己理解シート []年[]組[]番[]

【学校生活の実績】

○評定平均 []

○欠席 [] 遅刻 [] 早退 [] 皆勤

○部活動 [] 部

大企業・自衛隊など

○取得資格

○学校内での活動実績 (生徒会、部活動、委員会、ボランティア)

○ボランティア活動など学校外の活動への参加

【社会人として必要な基礎力】

①コミュニケーション能力

○自分から進んで、挨拶できる。(A B C D)

○相手の状況に応じて正しい敬語が使える。(A B C D)

○相手の意見を尊重しながら自分の考えが言える。(A B C D)

○苦手な人ともうまく付き合っていくことができる。(A B C D)

②職業人意識

○約束の時間や提出物の期限を守ることができる。(A B C D)

○規則や社会のルールを守ることができる。(A B C D)

○任せられた役割を最後までやり遂げることができる。(A B C D)

○人に迷惑をかけないという意識をもっている。(A B C D)

○働くことの目的と意義を理解している。(A B C D)

【保護者の意見】

○卒業後に進んでほしい進路 (○をつけてください)

(大学・短大・看護専門学校・専門学校・就職・その他)

○自宅からの通学・通勤 (○をつけてください)

(希望する・どちらでもない)

○保護者が希望する進路/就職先 (決まっている場合は具体的に)

○上記の進路を希望する保護者の思い

○子どもへの願い/伝えたいこと

【進学・就職に関わる社会環境】

○日本は新卒者を採用したいと考える企業が多い。

○フリーターから正社員に変わることは難しい。

○進路一歩の差が、就職先・年収に左右。

○就職一歩の差が、人生に左右。

○合格を決めるのは自分ではない。

人事を尽くして天命を待つ！

○進学希望者は第一志望校進学にかかる費用を調べよう。

【学校名】()	入学料	授業料	設備費・実習費等	合計
1年目				
2年目				
3年目				
4年目				

○私の進路希望 進学 (四大・短大・専門 校名) ・ 就職 ・ 未定

○新学年をどう過ごすか? 1年間の反省と来年度の目標を書きなさい。(頑張ったこと、不十分だったこと、来年度頑張りたいことなどの)

裏

春季休業課題「2年生を振り返ろう。」 ()組()番()

I. 自分の通知表を記録しておこう。

【1年生の記録】 *選択していない科目は空白

科目	国語	英社	数I	数A	生基	科人	体育	保健	芸術	音楽	家庭	福祉
評定												
教科	英語	ビジネス	簿記	情報	ビジネス	プロ	家庭総	生基基	生基積	ファブ	フード	
評定												

【2年生の記録】

科目名									
学年末評定									
科目名									
学年末評定									

1・2年生の評定平均() 欠席() 遅刻() 早退() 皆勤()

II. 2年生の自分を自己評価してみよう。

○安易な進路・早退のない、学校生活を過ごすことができた。	a	b	c	d
○授業にしっかりと取り組むことができた。	a	b	c	d
○提出物・課題は期限を守って提出できた。	a	b	c	d
○部活動に真面目に取り組むことができた。	a	b	c	d
○部活動・資格取得などで、成績(実績)を残すことができた。	a	b	c	d
○学生団体・ボランティア活動など、意欲的に取り組むことができた。	a	b	c	d
○家庭学習にしっかりと取り組み、基本的な学力を身に付けることができた。	a	b	c	d
○自分から進んで挨拶をすることができた。	a	b	c	d
○常識・マナーのある行動を身に付けることができた。	a	b	c	d
○初めて会う人や苦手な人とうまく接することができた。	a	b	c	d

a できた b まあできた c あまりできなかった d できなかった

○自分自身の成績 (1)を自己評価してみよう。
a 満足 b まあ満足 c 少し不満 d 不満

III. 自分の将来の進路について、現在考えていることを書こう。

「自己理解シート」は基本的にはLHRの時間に記入し、長期休暇の課題として出すことも。項目は時期や学年に応じて変化をつけ、2年生の春季バージョン(裏面)では、将来の進路について考えていることを書く欄を大きく設けている。

「自らの進路を自らの手で」
生徒が主体者である進路選択を

質の高い進路指導を実現しようという
ことでスタートしました」

進路サポーターと担任、生徒の関係性はさまざまだが、コンセンサスとしてあるのが、「生徒の進路指導の担当はあくまでも担任。進路サポーターは単独で行動・判断せず、必ず担任と連携・協力する」ということ。進路サポーターとしてのあり方や行動規範については、進路サポーター研修の場などで進路指導部主導で伝えている。

また、佐藤先生は今年度から、教員向けの進路指導通信の発行を始めた。通信の名は「羅針盤」。進路指導を指南するものとして活用してほしいという思いから、こう名づけたという。月2回ほど発行し、進路サポーター、担任の双方に向けて、進路指導に有益な情報や時期に応じたアドバイス、ノウハウなどを発信している。

「この通信を通して一番伝えたいのが、生徒自身に調べさせ、自らの進路を自らで切り拓くようサポートをしてください」ということ。本校の生徒はとも素直で、教員のアドバイスをそのまま吸収しがちなんです。生徒が主体者である進路選択を、先生方はそのサポートを……という願いを込めて、今年の進路指導のテーマは「自らの進路を自らの手で」としました」

「羅針盤」に掲載するのは、生徒に配布している「進路の手引き」の具体的な活用方法から、就職なら内定先へのお礼状の書

「自己理解シート」で主体的な進路選択を促す

き方、進学なら大学入試改革関連の情報などまで幅広い。「進路指導をしてください」と丸投げするのはなく、どうしたらいいかということまで道筋を示すことが大事。特に若い先生などは、高大接続改革の経緯や目的、大学入試の新しいシステムなどにあまり詳しくないケースもあるので、教員に知識をつけてもらい本校の進路指導の底上げをするという目的もある」と佐藤先生は話す。

生徒に進路サポーターがつくのは3年生になつてからだが、その生徒のそれまでの変化・成長や希望進路の変遷を知るための有効なツールがある。1年次から生徒自身が書き記す「自己理解シート」(ツール1)だ。進路スケジュール、就職試験や入試に必要な書類の書き方、先輩の体験記や進路実績、ワークシートなど進路にまつわるあらゆる情報や知識が1冊にまとめられた生徒向け冊子「進路の手引き」のなかにとじられており、学期ごとに年3回記入する。

自己理解シートの表面では、大きく4つの視点で自分の状況や自分を取り巻く環境への理解を深める。1つ目は、評定平均や出席状況、部活動、取得資格、学校内外の活動など「学校生活の実績」。2つ目は、自ら進んで挨拶をしているかなどの「社会人として必要な基礎力」の自己評価。3つ目は、「保護者の意見」。「進路については生徒本人と保護者との



進路指導部が教員に向けて発行している「羅針盤」。最新の求人状況や進路指導のto do, how toが事細かに記されている。担任と進路サポーターの双方に発信することで、目線を合わせ、連携をスムーズにする狙いもある。

意見が合わずにもめることが少なくないので、意向確認のために必ず保護者に書いてもらっている」という。そして4つ目が、「進学・就職に関わる社会環境」。進路希望者は、第一志望校進学にかかる費用を調べて記入する。この4項目を受け、生徒は自分の進路希望を書き記す。さらに裏面でも、成績の記録、生活態度などの自己評価、進路や今後の目標について記入するようになっていく。

「自己理解シートでは、自分で調べる、考える、知り得たことを言語化する、ということを中心にしています。大学進学を希望している場合は、志望校はどこか、大学で何を学びたいのか、さらに、入試はどうで費用はどれくらいかかるかという現実的なことも確認させます。漠然と大学に行きたいと考えている生徒も多く、イメージではなく具体的に何を学びたいのか、



進路サポーターの教員は必要に応じて面接の練習や小論文の添削なども行い、生徒の進路指導の“How”を担っている。

そのためにはどの大学のどの学部なら学べるのかを自分で深く考え、調べるよう動機つけるのが目的です。実際、自分の言葉で書くことを通して、少しずつ生徒のなかに自覚が生まれてくるように感じます」

自己理解シートは、年2回の教育相談（個人面談）や三者面談の際の参考資料としても利用される。年度末に書いたものは次の学年の担任に引き継がれ、3年進級時には進路サポーターにも共有される。また、志望理由書や履歴書を書く際の資料にもなり、まさにポートフォリオやキャリア・パスポートとしての役割を果たしている。

大事なのは、大目標に向かい、みんなが同じ方向を向くこと

自己理解シートを含む進路の手引き

成果と課題

は毎年5月に生徒に配布してきたが、今年度は休校のために分散登校が明けた6月中旬の配布となり、進路指導もそこから本格始動となった。高卒の就職試験の応募開始が1カ月後ろ倒しになったこともあり、「進学が就職かで迷った生徒が例年以上に多く、今年は生徒の心のケアも含めてよりきめ細やかな対応が必要に

なっている」という。

「日々の業務に忙しいなか進路サポーターを務めるのは易しいことではありませんが、生徒の進路実現という大目標に向かって教員みんなが同じ方向を向いて取り組めるよう、これからも進路指導部として下からしっかりと支えていきたいと思っています」

教員の連携が進み、進路指導の質が向上。今後の課題は生徒の書く力

進路サポーター制度の導入時には3年生の学年主任をしていた佐藤先生。導入前後の変化を肌で感じてきた。

「生徒の多様な進路に対応する必要があり、3年生の担任はとにかく大変だったのですが、履歴書や志望理由書の書き方指導や添削といった、Howの部分を進路サポーターの先生に任せることで、生徒一人ひとりの進路選択の本質である、Whyにフォーカスできるようになりました。また、進路や将来について複数の先生から意見やアドバイスを聞くことで、生徒は多様な価値観に触れることができます。総合的に見て、進路指導の質は確実に上がったと感じています」

また、学校を挙げての取組により、教員にも変化が表れている。

「担任と進路サポーターという立場で、学年や分掌、教科を超えて、生徒の情報共有などちょっとしたことを話すシーンが多く見られるようになりまし。生徒の成長や目標達成を共有

し、喜び合える同僚がいるというのは、教員にとっても嬉しいことですね。また、進路サポーターになった若手の先生が、私のところに質問に来たり、進路指導室で大学や入試の情報を探る姿をよく見かけます。教員自身が勉強しておかないと生徒にアドバイスはできませんから、そういう意識が芽生え行動してくれていることを頼もしく思います」

「羅針盤」の発行などを通して進路指導のさらなる充実を進める佐藤先生が、今後重点的に取り組むべき課題だと感じているのが、生徒の「書く力」だ。

「これまでも自己理解シートの記入などで、自分のことを自分の言葉で書く機会を設けてきましたが、まだまだ足りていないと感じます。入試改革や教育改革により、自分で考えて文章を書く力がこれまで以上に求められるようになっていきます。もちろん、これは大学や社会に出ても必要になるスキルです。しっかりと書いてこそ話せるようになるので、今後は国語科とタイアップするなどして、自分の意見や思いを言語化する力、それを人に伝える文章として書く力を育成していきたいと考えています」